様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０１１８

研究課題名（和文）日本オリジナルバレエの創造を目指した石田種生と創作アイデンティティの研究

研究課題名（英文）Studey of Taneo Ishida and his creative identity who aimed to create Japanese original ballet

研究代表者
稲田　奈緒美（NAOMI, INATA）

早稲田大学・坪内博士記念演劇博物館・招聘研究員

研究者番号：７０３６７１００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：石田種生（1929-2012）は“日本の風土的なバレエ”の創造を目指した舞踊家、振付家であり、創作過程でバレエ台本、振付ノート、公演評など多くの資料を遺した。これらの資料と関係者からのオーラルヒストリー収集によって、石田が生活に根付いた文化、民俗舞踊などに着目するに至った過程に、1950年代から60年代の社会主義リアリズムの影響があり、それをヒューマニズムに読み替えることで独自の作品創造を目指したことがわかった。
また、これらの資料から「石田種生コレオグラフィー・アーカイヴズ」を構築し、広く活用される研究環境を整えることができた。

研究成果の概要（英文）：Taneo Ishida (1929-2012) was a ballet dancer and choreographer who adhered to creating "Japanese indigenous ballet". He left many material such as ballet scripts, choreography notebooks and reviews during his creation process. The investigation of the material and oral history from the participants revealed that he was affected by the socialist realism from the 1950's to the 1960's. However, he gradually parted from the thesis and interpreted it in his own way, humanism. Thus he shifted his choreographic style with the culture rooted to everyday life and folk dance.
Also, I organized "Ishida Taneo choreography archives" by these material and arranged the research environment to utilize it widely.

研究分野：舞踊学

キーワード：日本のバレエ　石田種生　創作バレエ　振付アーカイヴズ　風土的バレエ

１．研究開始当初の背景

ヨーロッパで約400年の歴史を持つバレエを、日本は明治期に移入し、大正期から一般への普及が始まった。模倣することからバレエを学び始めた日本人舞踊家は、1950年代頃より日本独自の創作バレエを振付け、上演する動きを生む。

しかし、日本の経済成長に伴って、海外バレエ団の来日公演が増加し、日本のバレエ団では集客が容易な西洋古典作品の上演が増加するに従い、日本独自のバレエを創造する動きは弱まっていった。その中で舞踊家・石田種生（1929-2012）は、最後までその信念を貫いた稀有な存在であった。石田は、慶應義塾大学在学中にバレエと出会い、卒業後はプロの舞踊家、振付家として活躍した。1956年、1970年にはソ連にバレエ留学して研鑽を積む一方で、日本の文化芸術に対する深い理解と幅広い教養を活かして、《白鳥の湖》など古典の改訂を行うと同時に、《祇園祭》《枯野》《雪女》《昭和25年　もうひとつの夏》《お夏清十郎》《エスメラルダ》などの創作バレエ、すなわち“日本の風土的なバレエ”を次々と振付け、演出し、上演したのである。

2012年4月、石田種生の死去により多くのオリジナル・バレエ台本、振付ノート、公演批評等のスクラップなどの資料が遺された。これらは遺族と、石田が創立メンバーである東京シティ・バレエ団により、バレエ界の発展のために活かされることが望まれており、筆者が相談を受けた。それは筆者が石田種生から直接バレエの指導を受けた経験があり、身体に蓄積された知識を、学術研究として言語化して活かすことを期待されたためである。一方、石田種生ら日本のバレエ界の第二世代に当たる舞踊家、振付家、また日本のオリジナルな創作バレエに関する学術研究は未だなされておらず、研究の必要性があった。

２．研究の目的

本研究では、石田種生の遺族と東京シティ・バレエ団の協力を得て、石田の創作活動を資料とオーラルヒストリーから分析、検証することで、石田が西洋由来のバレエという身体芸術に対峙し、日本のオリジナル・バレエを創造しようとした手法と背景となる思想を考察することを目的とした。

石田種生の創作バレエの特徴は、自ら繰り返し記しているように、“日本の風土的なバレエ”である。石田がこのような特徴を持つに至った過程を、創作の際に作成したバレエ台本、振付ノート、公演評などの資料によってまず整理、分析する必要があるが、残された資料は膨大かつ、経年劣化が生じている。そのため、貴重な資料を保存、活用するために、画像データによるアーカイヴを作成することとした。

並行して、舞踊家、舞踊批評家らバレエ関係者、及び親族などからオーラルヒストリーを収集することで、資料による考察を補完する。残された資料は、専ら文字や独自の記号によって記録されているが、それらが実際にどのような振付、演出手法により、身体表現として具現化されたのかを検証し、さらに時代に通底する社会背景を考察するためである。

また、石田種生の代表作の一つである《エスメラルダ》は、韓国、米国のバレエ団で上演されている。ここで上演に関わった舞踊家らへの聞き取り調査も行うことで、国内外の作品理解、評価、受容を、多角的な視点から比較することが可能となる。これらの研究を通じて、日本の近現代における芸術、舞踊、身体とその創作アイデンティティの変遷の一端を検証し、グローバル化の中で創造、発信すべきこれからの舞踊芸術を考察する一助となる波及効果を生むことも目指した。

これらの研究成果を広く公開、発信し、学術研究者のみならず現代の舞踊家、また創造活動に従事する芸術家から一般の観客までが共有、活用できる環境を整えることによって、芸術文化の振興に寄与できれば幸いである。

３．研究の方法

石田種生邸には幅広い分野にわたる数多くの資料が遺されているが、その中からバレエ関連資料を収納したプラスチックフォルダー75 冊を選んで搬出し、資料整理、目録作成を行うことから研究に着手した。

その結果、内容を創作の時系列で分類すると、以下の 4 種類に大まかに分類することができる。

① 創作過程の資料：　創作ノート 54 冊、バレエ台本 37 冊。構成・舞台図面・大道具・小道具・衣装のデッサンや図面。楽譜。打ち合わせなどの書簡

② 公演時の資料：チラシ 55 枚、公演パンフレット 83 冊、チケット

③ 公演後の資料：新聞、雑誌等に掲載された舞踊批評切り抜き

④ 新聞切り抜き（日常的に行われていたもの）：バレエや芸術に関する記事、社会一

般に関する記事など多数

また、石田種生は舞踊界きっての優れた文筆家でもあり、多くの随筆や作品解説などを記し、新聞、雑誌、公演プログラムなどに掲載された。俳号を不舎と称して俳句も嗜み、文才を表した。これらの一部は書籍としてまとめられ、あるいは書き下ろして刊行されており、主な著書、翻訳書には以下がある。

・ユリィ・スロニムスキィ著『ボルショイ劇場』、渡辺洪との共訳、出版書肆パトリア、1957 年
・『跳ぶ思想－ソヴェトのバレエ・日本のバレエ』すたっふセンター、1967 年
・『舞踊への旅標』三省堂、1978 年
・『ボリショイ・バレエ　白鳥の湖』（写真：山本茂夫）、音楽之友社、1988 年
・『舞踊　生と死のはざまで』春秋社、1993 年
・『随想―バレエに食われる日本人』文園社、2007 年

上記資料の中から①、②、③、及び著書を画像データとして保存し、アーカイヴを構築することにした。貴重な史料を良好な状態で保存しつつ、資料へのアクセスを容易にし、石田の創作活動の分析を進めるためである。そのため、資料を全てスキャンしてデータとして蓄積しながら、資料の内容、特性などを分析し、保存、活用に相応しいアーカイヴをデザイン、構築するための打ち合わせを専門家と重ね、試行、改訂を繰り返しながら作成した。

並行して、石田種生と同世代の舞踊家、振付家、舞踊批評家、石田種生作品に出演した現代の舞踊家、及び親族らへの聞き取り調査によってオーラルヒストリーを幅広く収集し、研究を補完する必要がある。そのため、東京シティ・バレエ団、石田の遺族らの協力を得て関係者にインタビューを行い、さらに一般にも公開する研究会を開催し、多くのゲストスピーカーを招いた。インタビューは、日本国内、韓国、米国で約 10 名に行った。研究会では述べ 14 名のゲストスピーカーから貴重な証言を得た。
また、舞踊以外の専門分野の研究者らを交えて研究会を開催し、多角的な意見を求めた。
学会発表は、国内で 2 回、国外で 1 回行い、多様な意見や情報を得ることができた。

４．研究成果

石田が創造過程で残した膨大な資料を、「石田種生コレオグラフィー・アーカイヴズ」としてほぼ完成することができた。同アーカイヴは約 1500 のデータからなり、それぞれ資料をスキャンした画像データに資料名を付し、その種類、著者、発行/編集者、発行年月日などの情報を入力した。その結果、貴重な資料を保存しつつ、資料へのアクセス、検索、閲覧が容易になり、研究環境を整えることができた。本研究のみならず今後、石田種生並びに日本の創作バレエ研究が広く行われるために公開、活用されることが望まれる。
2016 年１月に開催された東京シティ・バレエ団による石田種生改訂振付《白鳥の湖》公演の際には、会場となった新国立劇場ロビーでこれを一般に公開し、活用方法のデモンストレーションを行った。これにより公立文化施設からの依頼を受け、上記博物資料と「石田種生コレオグラフィー・アーカイヴズ」を寄贈、一般公開するために現在準備、調整している。

資料のアーカイヴ化を進めながら分析、整理して石田の思索と実践の軌跡を辿り、同時に研究会の開催、関係者へのインタビューを行いながら考察を進めたことで、石田の創造の源となった事象が多岐にわたり、国内外の舞踊家、芸術家との幅広い親交があり、様々な影響を受けていたことが判明した。それにより、石田の創作バレエ作品そのものと、それを創作するに至った戦前から戦後の日本社会を背景とした思考の軌跡、そこから垣間見える日本人バレエダンサー、振付家としてのアイデンティティへの考察を進め、以下の研究成果を得た。
石田種生の生い立ちから始め、主として 1950 年代から 60 年代の創作活動を概観すると、最初の転機となったのが、1955 年に松山バレエ団が初演した《白毛女》であった。本作の背景にソ連、中国の社会主義リアリズムの直接的な影響があり、形式としては中国の民族舞踊を用い、内容としては社会主義を表すバレエであったこと、実質的にバレエ台本、振付を担当したのは石田であることが明らかになった。
しかし、石田はその洗礼を浴びながら、自らの企画で最初に創作して故郷に錦を飾ったバレエ〈浮布物語〉（1956）が郷里の民話に基づき、郷土愛や師弟愛といった文脈で解釈されたことにより、教条的な社会主義リアリズムに陥ることなく、また、自らの郷里という具体的な風土に着目する機会を得たと考えられる。その経験から思考を始めることで、松山バレエ団で社会主義リアリズムに基づく内容の作品を振り付ける際にも、郷里の民俗舞踊を洗練させて引用し、内容を社会主義からヒューマニズムへと読み替えていったと考えられる。
1968 年に石田は松山バレエ団を退団し、日本初の民主的なバレエ団である東京シティ・バレエ団を創設するメンバーの一人となった。そして、より意識的に“日本の風土的なバレエ”の創造を目指すことになる。石田

は自ら、その転機を1963-1964年にＮＨＫから「日本の物語による創作バレエ三部作」を委嘱されたこと、1970年の文化庁在外研修でソ連に滞在した際の経験であったと、様々な著書で記している。しかしながら本研究によって、その時期以前に社会主義リアリズムの直接的な影響を受けて、国を代表する民族舞踊、地域に根差した民俗舞踊に着目しながらも、それを徐々に転換していった経緯と背景が明らかになった。“日本の風土的なバレエ”の創作に生涯こだわり続けた石田の作品は、決して常に高い評価を得たわけではなかった。しかし、石田の振付・演出は、社会主義リアリズムを通過しながらドグマに陥ることなく、「民族バレエ」を“日本の風土的なバレエ”へと読み替えることで、自らの振付家としての方向を見定め、アイデンティティを確立していったと考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）

① 稲田　奈緒美、振付家・石田種生が目指した“日本の風土的なバレエ”～社会主義リアリズムによる民族バレエからの転換、演劇研究、査読有、第39号、2016、93-110
DOI:
http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/handle/2065/47778

〔学会発表〕（計　3　件）

① NAOMI INATA,
Democratization and creative activity in the administration of Japanese Ballet Company — Through the establishment process of the Tokyo City Ballet and choreography of Taneo Ishida, International Federation for Theatre Research 2015, 2015年7月10日,「Hyderabad(India)」

② 稲田　奈緒美、振付家・石田種生が目指した“日本の風土的なバレエ”～プロパガンダから風土への転換、日本演劇学会、2015年6月20日、桜美林大学（東京都町田市）

③ 稲田　奈緒美、“日本の風土的なバレエ”を目指した石田種生の創作作品に見られる身体言語、日本演劇学会、2014年11月16日、京都外国語大学（京都府京都市）

〔その他〕

① 「石田種生コレオグラフィー・アーカイヴズ」の作成、および公立文化施設での公開へ向けた準備、調整

６．研究組織

(1)研究代表者
稲田　奈緒美（INATA, Naomi）
早稲田大学・坪内博士記念演劇博物館・招聘研究員
研究者番号：70367100

(2)研究協力者
安達　悦子（ADACHI, Etsuko）
山本　千絵（YAMAMOTO, Chie）
石田　汗太（ISHIDA, Kanta）
石田　知子（ISHIDA, Tomoko）